際どうしても維新に於ける「日本外史」「太平記」などのような読んものを、国民に与えて奮起させねばならない。それには硬いものよりむしろ「太平記」のような小説で、読者の興味のうちに引き入れることが上策であると考えて腹案を練った。

（この項 つづく）

偶感

大内勢の堅田侵攻についての一考察

佐伯史談会
会長 高木嘉吉

嘉吉元年の大内勢の堅田侵攻については、姫岳の合戦の余波として、佐伯史談八十一号に管見を述べて諸賢の批判を仰いだが、なぜ大内勢が堅田に侵攻したかについては不明で、想像を記すに止めて残念に思っていた。

ところが先日、加藤会員とある事で佐伯氏の系図を調べた。そのとき増村隆也氏の佐伯郷土史後編に記載されている佐伯氏の系図にも目を通した。そして九代惟世の妹が大友持直に嫁していることを見出して、はたと膝をたたいた。此の発見で前述の疑問が一応解決した。当時佐伯氏は日田氏田原氏と並んで、豊後に於ける強大な氏族であったが、姫岳の戦には持直を支持して、大内勢と戦ったことは間違いないと確信した。

かくて大内教弘の嘉吉元年に於ける九州出兵に当り、教弘は持直必ず佐伯に在らんと考え、又姫岳の戦に大内勢を悩ませた佐伯氏を撃滅せんものと、佐伯氏の本拠であった堅田侵攻となったのであろう。

ここで痛感することは、佐伯氏の系図は何度も調べているのに、大事なことを見落していた迂闊さであり、一行の記録が事件解決の端緒となる記録の大切さである。心して郷土史探訪の旅を続けようと思う次第である。

（おわり）

随想

楠

市野瀬 仁

私は学校まで毎朝二十分間、川辺の道を毎日歩いて通っている。帰りは、草色の水面から魚が突然はね上ったり、舞きなして泳ぐ様を眺めたりして、楽しみながら家路に向かう。

学校とわが家の真中位の所に、大きな楠が一本、亭々と聳えている。楠は道路の真中にあって、右と左に蛇走する車を、見下して立っている。

ここは昔、九十九浦の漁船や渡船が集まる船着場の近くで、住吉神社の境内、そして楠はその神木であった。家に近ずくにつれて、川は溝のように濁り、臭くて魚は全く見えない。私は悲しいけれども、この道を通る。

私の通る道は、望め立ての所が多く、太い木の根っこが、あすこに一つ、ここに一つと、河岸であった石垣を抱いたまま、無惨な姿で枯れ果てている。

いずれも巨木であった。毛利公の参覲交代の船出を見ていた、数少ない大切な樹々であった。

それが、今ではただ一本の楠のみとなってしまった。

私は朝夕、自然の変遷と人間の歴史について、この楠から聞かされるのである。

— NHK「くらしの広場」提供原稿（放送済）より